

ハ短調ミサ曲はどのようにして書かれたのか？

3. コンスタンツェとの結婚

1782年8月、モーツァルトは当時二十歳であったコンスタンツェ・ヴェーバーと結婚しました。ヴェーバー家はドイツ国民歌劇の生みの親である作曲家カール・マリア・フォン・ヴェーバーの親戚筋に当たり、コンスタンツェの父はマンハイム宮廷歌劇場のバス歌手、姉のアロイジアはウィーンの宮廷歌劇場に属するソプラノ歌手、コンスタンツェもソプラノの歌手でした。この一家とモーツァルトの縁は、1777年から半年間マンハイムに滞在していたモーツァルトが、アロイジアの歌の教師となったことに始まります。このとき彼はアロイジアに恋をしますが、結婚の意思と二人でイタリアに行き、彼の地でオペラを上演するという息子の夢を告げられた父親レオポルトは息子の将来を案じて反対し、パリ行きを強く促しました。(父が期待した期待したパリでの就職活動は失敗したばかりか、同行した母まで失ってしまいますが)止むなくモーツァルトはアロイジアとの結婚を断念します。しかし1781年3月にウィーンにやってきたモーツァルトは、2年前この地に移ってきたヴェーバー一家と再会し、5月からヴェーバー家に寄宿するようになりました。しかしレオポルトはその直後に起こった息子とコロレド大司教との決裂の原因がヴェーバー家にあるとにらみ、そこを出るよう何度も息子を説得します。この頃からモーツァルトはすでに結婚していたアロイジアの妹、コンスタンツェを愛し始めていたようです。この結婚話にも父親は猛反対です。息子がやり手のヴェーバー夫人(夫はすでに他界)にはめられたのではないかと疑ったからです。結局モーツァルトはレオポルトの同意を待たずウィーンでコンスタンツェと結婚しました。

4. ミサ曲奉納の決意

「ハ短調ミサ曲」を生んだ原動力の一つは前号でご紹介した「バッハ・ヘンデル体験」、もう一つはコンスタンツェとの結婚です。作曲への直接の動機となったのは後者で、モーツァルトはザルツブルクに住む父レオポルトに自分たちの結婚を承諾してもらうために、新妻コンスタンツェが立派なソプラノ歌手であることを示すべく、父へのお披露目として彼女にソロを歌わせる楽曲を構想したというわけです。その音楽とは彼が密かに故郷の教会への奉納を誓ったミサ曲に他なりません。

ちなみにウィーン定住後のモーツァルトが作曲した教会音楽は、断片を除けば「ハ短調ミサ曲」「アヴェ・ヴェルム・コルプスそしてあの「レクイエム」しか残っていません。しかも「ハ短調ミサ曲」は彼が他者からの依頼なしに自発的に作曲した、ただ一曲の教会音楽でもあります。モーツァルトがこのミサ曲を作曲するに当たりその持てる力を最大限注ぎ込んだことは、未完でありながら演奏時間が50分以上にわたる長さ、最大8声の合唱、4声のソロ、トランペット2本、トロンボーン3本、ホルン2本、ティンパニを含む大きな編成のオーケストラという外観からも十分に伺われます。

それと同時に「ハ短調ミサ曲」にはソロの楽章ではイタリアで学んだオペラの作曲技法、合唱の部分では「バッハ・ヘンデル体験」に触発されたバロック的な対位法を駆使して、ザルツブルク時代には見られない充実した内容になっており、もしこれが完成(ミサ通常文全体の作曲)されていればどれほどのスケールになったことだろうと想像せずにはいられません。ちなみに20世紀前半に活躍したドイツの音楽学者アインシュタイン(筆者注:物理学者とは別人、ファーストネームはア

ルフレート、縁戚関係もなし)はこの曲について「このトルソ(筆者注:人間の頭部・腕・足・脚を除いた胴体部分のこと、またその彫刻)はそれのみで燦然と輝く。・・・中略・・・このトルソがバッハの『ロ短調ミサ曲』とベートーヴェンの『荘厳ミサ曲』との中間に位置する唯一の作品である、と言われたのは正しい」(出典不明)と述べています。

5. 作曲の経緯

先に挙げた動機から、モーツァルトは「ハ短調ミサ曲」をどこからも依頼を受けることなく自発的に作曲しました。これは当時の宗教音楽にあっては異例のことであって、もう一つの例外はかのバッハが晩年に集大成した「ロ短調ミサ曲」が挙げられるばかりです。けれどもバッハはこの巨大なミサ曲を実際に典礼の中で演奏する構想を持っていませんでした。バッハの属するルター派のミサ(礼拝)では通常文のすべてが唱えられることはなく、実際にラープツィヒのトーマス教会で演奏されたバッハの「小」ミサ曲は、すべて「キリエ」と「グローリア」の楽章のみ作曲されています。

個人的な作曲の動機、当時の制約を無視する音楽の時間的規模、未完に終わった作曲、どれをとっても異例づくめの「ハ短調ミサ曲」ですが、ここで一応判明している限りの事実に基づいて作曲の経過をたどってみましょう。モーツァルトがこの曲の作曲を始めたのはいつであったか確定していませんが、1783年1月4日付け父レオポルト当ての手紙で彼は「僕が実際にその(筆者注:ミサ曲の奉納)誓いをたてたことの証拠としてミサ曲の楽譜が半分ほどできています。そして完成の希望に燃えているところです。」と書いていますので、遅くとも前年の暮れと想像されます。

モーツァルトにとって作曲に要する時間とは、すでに彼の頭の中でできあがっている音楽をただ五線紙に書き写すに必要な時間だけ、といわれたほどの天才ですから、残り半分を作曲してミサ曲を完成させることは、手紙に表れたこの曲に対する彼の意気込みからすれば、それほど時間を要するとは思えませんが、実際に作曲されたのは半分とちょっとですから、この手紙から先ザルツブルクで演奏する10月まで1年近く、ミサ曲の作曲はほとんど進展していないということになります。ザルツブルクに移動した後も初演の後ウィーンに戻ってから彼は再び作曲に取り組みますが、結局未完に終わっています。実に不思議なことです。音楽学者のカルル・ド・ニは「この曲がバッハのロ短調ミサ曲とベートーヴェンのニ長調ミサ曲(荘厳ミサ)との中間にあって、音楽の記念碑的存在であることを考えると何とも残念でならない。」と述べています。(「モーツァルトの宗教音楽」相良憲昭訳 白水社 1989)

6. 未完の理由

この問いについては過去多くの説が出されていますが、後に述べる理由から筆者はド・ニの見解が妥当であると考えます。前掲書の中で彼はこう述べています。「この記念碑的なミサが、外的な煩わしさに拘束されずに、彼の内にあるミサのための音楽の理想を具現したものであると言い切っても良かろう。しかもそのことが、まさに未完に終わった原因を探る糸口のの一つであるとさえ考えられるのではないだろうか。・・・(次号に続く)」

【後記】

「ハ短調ミサ曲」作曲の動機と経過をたどり、未完に終わった理由の解明を試みてみました。筆者には少しずつその過程が見えてきたような気がしますが、皆様はいかがお感じでしょうか。次回はド・ニの見解を筆者の考察も交えて謎解きを進め、合わせて初演の様子もご紹介して本題を締めくくりたいと思います。

(新井)